

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：食物栄養学科

資格：教授

氏名：前田 佳予子

研究分野 1. 高齢者の咀嚼評価 2. 統合失調症患者の咀嚼評価	研究内容のキーワード 1. 咬合力、色変わりガム、握力、向精神薬 2. 早食い、抗コリン薬、咬合力
学位 博士（保健衛生学）、家政学修士、家政学士	最終学歴 鈴鹿医療科学大学大学院 保健衛生学研究科 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
----	-----	----

1 教育方法の実践例

--	--	--

2 作成した教科書、教材

1. 人生の最期まで食事を楽しむレシピ集	2022年10月7日	日本在宅栄養管理学会編 本書は、診療報酬（令和2年）・介護報酬（令和3年）、学校給食摂取基準（令和3年）の各改定に沿って一部内容を見直し「五訂版」とした内容である。 地域包括ケアシステムの構築へ向けた施策を背景に地域・在宅における身体・生活状況に応じた栄養管理の必要性は大きい。在宅傷病者、障害者（児）、高齢者の栄養管理についての知識と実践ノウハウと関係する他の専門職との連携マネジメントについて概説している。 本書は診療報酬・介護報酬、健康増進法（平成30年）、授乳・離乳の支援ガイド（平成31年）、学校給食摂取基準（平成30年）、食に関する指導の手引き－第二次改定版－（平成31年）の改定に沿って、一部内容を見直し「四訂版」とした。 臨地実習担当の教員が各施設における具体的な実習スケジュールや課題の取り組みを実例で示し、学生がイメージしやすいように、できるだけ具体的な内容とした。 栄養士・管理栄養士は科学的根拠に基づき人々の栄養状態の維持・増進を目指した行動変容を起こさせ、さらに人々の生活の質の向上のための社会環境の変容に繋がるように作成した。
2. 五訂臨地実習ガイドブック	2022年2月1日	
3. 演習で学べる在宅栄養支援－地域共生社会における管理栄養士の役割－	2020年5月15日	
4. 四訂臨地実習ガイドブック	2019年12月5日	
5. 三訂臨地実習ガイドブック	2017年12月15日現在	
6. 栄養教育論 第2版	2017年3月25日現在	

3 実務の経験を有する者についての特記事項

1. 東京栄養サミット2021厚生労働省主催イベント	2021年12月7日	地域高齢者に対する栄養の取組について、国際的にも超高齢社会の一層の進展が見込まれる中、健康長寿社会のトップランナー国として、地域での対応策も含め、高齢者への栄養の取組について、世界に向けて知見を共有する。 わが国で問題となっている少子高齢化、人口減少の問題についてこれからの高齢社会で問題となっていることや、健康寿命の延伸するためにはフレイルになる前の予防的対応が重要な鍵になることや、浜甲子園の独居高齢者の咬合力アップ運動について発表 厚生労働省の委託事業で、公益社団法人日本栄養士会と一般社団法人在宅栄養管理学会の共同認定の在宅訪問栄養食事指導のスーパーバイザー研修会の講師 管理栄養士の免許を持ち、管理栄養士として実務経験5年以上の者が在宅訪問栄養食事指導に関する授業・研修等の教材作成、在宅訪問管理栄養士の認定講師を行っている。
2. 栄養科学研究所公開シンポジウム	2018年03月10日	
3. 在宅栄養専門管理栄養士	2017年09月01日2017年09月03日	
4. 認定在宅訪問管理栄養士	2012年12月現在	

4 その他

--	--	--

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
----	-----	----

1 資格、免許

1. 在宅栄養専門管理栄養士	2012年04月01日現在	栄養教育論の授業で在宅訪問栄養食事指導の業務内容や地域連携、多職種連携について実践論を講義している
----------------	---------------	---

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2. 介護支援専門員	1999年11月	る 管理栄養士登録
3. 健康運動指導士	1996年01月	
4. 管理栄養士	1983年12月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 全国在宅医療会議 構成員	2016年7月2019年7月	在宅医療の推進に向け、在宅医療提供者、学術関係者、行政で、「在宅医療推進のための基本的な考え方」を共有し、これに沿って、関係者がとるべき具体的な対応について議論していくこととする。 本事業は、複雑で解決困難な栄養の問題を有する個人や集団等の対象特性に応じた栄養管理の実施及び食事指導の拠点となる栄養ケアステーションの機能強化に向けて 管理栄養士による在宅高齢者の栄養管理のあり方に関する調査研究事業で1)管理栄養士による居宅療養管理指導の実施の有無2)管理栄養士による在宅高齢者への栄養管理を行う体制を明らかにした3)在宅高齢者の摂取状況・栄養状況把握方法、栄養食事指導方法と地域連携方法の提案(ガイドライン作成) 国立長寿医療研究センター、全国在宅歯科医療・口腔ケア連絡会、全国在宅療養支援診療所、日本介護支援専門員協会、全国薬剤師・在宅療養支援連絡会、日本看護財団、日本医師会、全国在宅訪問栄養食事指導研究会で在宅療養患者のより質の高い在宅生活を維持・継続するために実態を調査・把握し、課題を分析する際のアドバイザー
2. 平成28年度厚生労働省委託事業 管理栄養士専門分野別人材育成事業	2016年04月現在	
3. 平成26年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業 管理栄養士による在宅高齢者の栄養管理のあり方に関する調査研究事業	2014年07月2015年03月	
4. 平成24年度老人保健健康増進事業 在宅療養患者の摂食状況・栄養状態の把握に関する調査研究	2012年10月15日2013年3月	
5. 平成27年度岡山県医療介護総合確保基金事業		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 人生の最期まで食事を楽しむレシピ集	共	2022年10月7日	一般社団法人 日本在宅栄養管理学会	前田佳予子、中村育子、田中弥生、小川豊美、塩野崎淳子、高崎美幸、馬場正美、古川美和、前田玲、松岡和子、水島美保、本川佳子、森茂雄：人生最終段階での食べやすいレシピ集の作成にあたり、1. 食欲不振2. 吐気・嘔吐3. 口内炎・お口のトラブル4. 飲み込みにくさ5. 腹部膨満感6. 便秘・下痢7. 味覚・嗅覚の異常8. 呼吸苦9. お楽しみの症状別で作成し、「いつでも、どこでも入手しやすい、誰でも簡単にスピーディーに調理できる」レシピ集に編集した。 在宅医療の対象者は小児から高齢者と定義され、医療的ケア児の訪問栄養食事指導が年々増加している。このような状況を鑑み、包括的な実践的テキストを作成している。執筆者は日本栄養士会と共同認定の在宅訪問管理栄養士・在宅栄養管理栄養士の実践者たちの執筆された本である。 近年、管理栄養士養成において在宅栄養支援に関する知識とスキルを養うことは重要とされている。傷病者・障害者に対する管理栄養士の役割として、栄養管理プロセスを理解し、実際に栄養状態の評価・判定や栄養介入ができるスキルを身に付ける教育は早急に行わなければならないので、日本で初めて管理栄養士が地域支援をどのようにするかを理解させる本である。 第12章pp. 422-427在宅栄養管における管理栄養士の役割について、介護者が調理の際、食材の選択、ミキサー食での食材の潰し具合などに困った時管理栄養士との連携が必要である。小児の在宅訪問栄養食事指導は医療保険の対象となるが、主治医と同一の施設の常勤・非常勤の場合でない診療報酬に請求できない問題点など事例を通して記載している。
2. 訪問栄養食事指導実践テキストブック	共	2021年4月30日第1版第1刷発行	一般社団法人日本在宅栄養管理学会	
3. 演習で学べる在宅栄養支援	共	2020年5月15日初版発行	建帛社	
4. 小児臨床栄養学 改定第2版	共	2018年10月31日	株式会社 診断と治療社 日本小児栄養消化器肝臓学会	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
5. 在宅医療マネジメントQ&A	共	2018年5月15日	日本医事新報社	在宅医療に関するQ&A集であるが、国が目指そうとしている地域共生型社会を見据えた、在宅医療および地域共生型を取り巻く様々な職種協働の実像を提供している。この本は実践的な内容を重視した内容である。 p176～p178栄養士と管理栄養士の違いとは。管理栄養士の訪問活動とは
6. 栄養教育論第2版	共	2017年3月27日	朝倉書店	田中敬子, 前田佳子編 少子高齢化, 人口減少という社会的ニーズに対応するため平成27年4月に発表された国家試験ガイドラインをふまえ, 最新情報を盛り込み, できるだけ幅広い知識が得られるように編集した。
7. 改訂臨地実習ガイドブック	共	2016年02月01日	建帛社	前田佳子, 高岸和子編 臨地実習ガイドブック内容に「日本人の食事摂取基準」2015年版が公表されたことに伴って記述を見直し「改訂版」とした。
8. 臨地実習ガイドブック	共	2011年02月	建帛社	前田佳子, 高岸和子, 林宏一, 谷野永和, 岸本三香子 武庫川女子大学食物栄養学科・食生活学科の学生が教育効果の高い実習内容を達成できるように各施設における具体的な実習スケジュールや課題の取り組みを実例で示し, 学生が実際の現場をイメージしやすいように具体的な内容にした。
9. 栄養教育論	共	2010年03月27日	朝倉書店	前田佳子 田中敬子編 栄養教育推進に必要な総合能力の向上のために, 関連科目である「応用栄養学」「公衆栄養学」「臨床栄養学」「給食経営管理論」などを考慮した栄養教育事例の検討や学習に配慮している。また, 管理栄養士・栄養士の責務として科学的な根拠に基づき確かな栄養アセスメントに基づく栄養教育の企画, 実施, 評価の総合マネジメント行う能力を高めることができるようになってきている。
10. 高齢者の栄養障害の原因 嚥下障害Q&A	共	2008年11月	メディカ出版	手嶋登志子, 秋山治子, 川上純子, 工藤美香 高齢者の咀嚼障害によってどのような栄養障害が起こるのか?。咀嚼障害はどのようにアセスメントすればよいのか?。咀嚼障害を起こしやすい原因は何か?について説明
11. クエッション・バンク 管理栄養士 国家試験問題解説	共	2007年07月	MEDIC MEDIA	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他
12. 高齢者施設用語辞典	共	2007年04月	中央法規	小室豊允
13. 患者指導に役立つ 病態・状況別栄養管理と看護	共	2007年01月		1
14. クエッション・バンク 管理栄養士 国家試験問題解説	共	2006年07月	MEDIC MEDIA	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他
15. クエッション・バンク 管理栄養士 国家試験問題解説	共	2005年09月	MEDIC MEDIA	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他
16. 在宅患者への訪問栄養指導	共	2004年12月	メディカルレビュー	故倉恵 在宅医療は年々高度になっている。今後、在宅患者への栄養管理をどのようにとらえて展開していくかが訪問栄養指導の存続を決定する。現在の在宅訪問栄養食事指導の現況に触れ、慢性閉塞性肺疾患の患者へ他職種とチーム連携を2年以上行い、現在も訪問栄養指導を実施している症例について述べている。
17. 臨床栄養事例集	共	2004年11月	南山堂	中村丁次
18. 栄養教育論 I	共	2004年11月	建帛社	中村丁次, 外山健二
19. クエスチョン・バンク 管理栄養士 国家試験問題解説	共	2004年10月	メディクメディア	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他 管理栄養士国家試験問題解説の栄養教育論の分野において, 解説を担当
20. 事例・症例に学ぶ栄養管理	共	2004年10月	南山堂	中村丁次, 板倉弘重編集 在宅栄養ケアの栄養管理について症例1. 慢性閉塞性肺疾患で独居の男性, 症例2. 低栄養で貧血の高齢女性, 症例3. 糖尿病性腎症でコントロールが必要な独居女性の栄養管理, 栄養管理プラン, 栄養管理の実施について述べている。
21. 給食経営管理・運営	共	2004年04月	同文書院	藤沢良知編著

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
論 22. 給食経営管理論・運営論	共	2003年05月	同文書院	保健・医療・福祉・介護における給食の位置づけと給食経営について、マネジメントの基本的な考え方や方法を学ぶことの重要性について述べ、福祉施設、学校給食、事業所給食について学ぶ。 松月弘恵、田中律子、田中弥生、金子義幸、田村朝子、宮田房夫、本間治子、辻ひろみ、清水典子、渡辺喜弘、永島伸浩、淀川都、大関喜美子
2 学位論文				
1. 産地別日本茶の経口投与における生体機能への影響についての研究	単	2005年03月		お茶には、抗肥満、抗糖尿病効果はカテキンやカフェインが大きく影響すると考えられてきたが、ビタミンC、テアニン、バナジウム以外は大きな差がない同一品種で同一工程のお茶で差があった。単独の成分濃度ではなくその組成が重要であることがわかった。
3 学術論文				
1. COVID-19感染前後における咬合状態・身体状況へ(査読付)	共	2024年6月25日	一般社団法人日本在宅栄養管理学会、日本在宅栄養管理学会誌Vol. 11No.1 2024 p3-10	田中龍舞、前田佳予子：全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動は加齢に伴う筋力および咀嚼能力の低下を抑制する効果をもたらすことが示唆された。また、「運動冊子」や「チェックリスト」などの紙媒体を配布し、コロナ禍の運動未実施期間や運動の実施日以外にも自宅でも運動を促したことが運動習慣を確立し、筋力の維持に効果をもたらしたと考えられた。
2. 人生の最終段階を含めた高齢者に対する食支援の在り方について―多職種に対する質問票による課題検討―(査読付)	共	2023年12月刊行予定	日本在宅栄養管理学会誌第10巻2号 p179-185	森茂雄、前田玲、本川佳子、中村育子、前田佳予子、田中弥生、高崎美幸、松岡和子「人生の最終段階の食支援」に関する項目の調査用紙を作成し、その結果、特定の職種に限らず多職種から人生の最終段階において食支援の重要性と管理栄養士の必要性が高く認知されている可能性が示された。多職種から食支援を必要とする場面と求められている食支援内容から実際に管理栄養士に依頼してよかったと認識されている可能性も示唆された。最期まで自分の口で食べることは、療養者と家族のQOL向上になる可能性があり、多職種協同のなかで実現すべき課題であることが明らかになった。
3. 終末期の在宅療養者に対する在宅訪問栄養食事指導の介入効果(査読付)	共	2023年8月	日本在宅医療連合学会誌第4巻・第3号19-27	中村育子、前田佳予子、田中弥生、本川佳子、水島美保、前田玲：在宅訪問栄養食事指導における食支援は、管理栄養士が介護者の困りごとの相談に応じて、介護者の調理技術の向上や簡単に食事を用意できることを可能にし、介護者の食事づくりの負担を軽減させ、在宅療養者が好物を最後にたべることができるよう貢献した。
4. 在宅ケアにおける管理栄養士・栄養士の課題と役割～「第8次医療計画」を見据えて～	単	2023年7月1日	公益社団法人 日本栄養士会、日本栄養士会雑誌Vol. 66 No.7, 2023	前田佳予子：在宅医療における各職種の関わりで管理栄養士による在宅訪問栄養食事指導を「第8次医療計画」における在宅医療の指標に追記されたことによるこれからの在宅ケアにおける問題点と課題について明らかにした。
5. 配食サービスを利用する地域高齢者の咀嚼能力の違いからみた身体・生活状況および栄養状態の現状について(査読付)	共	2021年11月3日	日本在宅栄養管理学会誌 8(2)137-147	片岡文乃、前田佳予子、山野葉子：地域在住高齢者における配食サービス利用の有無による検討により、配食サービスは高齢者の健康を支援する1つの手段となることが推測された。また、配食サービスを利用する高齢者へのよりよい食支援のためには、栄養の充足だけでなく、高齢者個人の生活状況や配食サービス利用の関わり方に応じて栄養・運動・社会参加の三位一体を考慮した支援が必要で、社会とのつながりを充実させる支援が重要であることが示唆された。
6. 京都府の通所介護サービスを利用する高齢者における配食サービス利用者の現状について(査読付)いて	共	2020年9月30日	一般社団法人日本在宅栄養管理学会、日本在宅栄養管理学会誌Vol. 7No.1	片岡文乃、前田佳予子、山野葉子：地域在住高齢者における健康の維持・増進ならびに病気の予防・治療における管理栄養士の役割を配食サービスを通して検討を行い。「食」を教育媒体とし、よりよい食生活を実践するために「栄養」「運動」「社会参加」の三位一体を包括的に底上げし、高齢者の孤食に配慮した支援の必要について述べている。
7. 地域在住後期高齢者における栄養状態と生活環境についての検討 (査読付き)	共	2019年4月6日	日本家政学雑誌、70巻・8号、535～542	高橋志乃、山野葉子、前田佳予子：高齢者を支援するには、世帯構成の違いが影響を与えていることが示唆され、高齢者を支援するサービスおよびネットワーク構築のためには、高齢者を取り巻く環境の現状やニーズを把握し、効果的なサービスを提供することが、今後、さらに重要になることが考えられた。
8. 80歳以上の自立した地域高齢者における	共	2019年03月30日	日本在宅栄養管理学会誌5巻・3号9-	高橋志乃、前田佳予子、山野葉子、片岡文乃本研究では、自立した地域在住高齢者の食欲不振に着目し、現状と関連要因について検討する

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
食欲不振の現状と関連要因の検討(査読付)			17	ことを目的とし食用不振評価票で分類し、栄養状態、身体機能、口腔機能について検討した結果、自立高齢者において、食欲不振という潜在的な低栄養のリスクを抱えていても問題が顕在化しにくいことが示唆された。
9. 在宅栄養専門管理栄養士認定の実績と今後の課題(査読付)	単	2018年05月07日	日本在宅栄養管理学会誌, 5巻・1号9-12	前田佳子、在宅栄養専門管理栄養士と在宅訪問管理栄養士の業務内容について明確に区分けを行い、平成30年度介護報酬、診療報酬改定において、国の方針がはっきりと在宅医療に舵をきられたことより、在宅医療に重点がおかれ多職種協働・連携の重要性についてと今後の課題について記載した。
10. 睦町クリニック認定栄養ケア・ステーションにおける在宅訪問栄養食事指導の効果(査読付)	共	2017年6月1日	日本栄養士会雑誌 60(7)29-37	工藤美香, 田中弥生, 前田佳子, 他: 本研究では、睦町クリニックに認定栄養ケア・ステーションを設置し、その業務の一環として在宅訪問栄養食事指導を実施、栄養介入後に患者介護者および連携事業者へのアンケート調査を行い、栄養介入後のアウトカム及び連携方法について検証した。認定栄養ケア・ステーションにおける管理栄養士の栄養介入は、栄養状態を改善し、ADL, QOLも改善傾向を示し、要介護状態にある患者の重症化予防に寄与すると考えられた。
11. 「おたっしや健康手帳」導入による地域での「予防的対応」への効果について(査読付)	共	2017年03月28日	日本在宅栄養管理学会Vol.3(2)119-131	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳子 わが国では「地域包括ケアシステム」の実現が求められている。今回、地域に在住する高齢者の身体状況・口腔機能状況・栄養状態を調査し、その情報を本人はもとより、本人を取り巻く栄養状態に関わる全てのスタッフが共有するための媒体として「おたっしや健康手帳」(以下、健康手帳)を作成し、この媒体が「予防的対応」の一つのツールとして活用できるか否かを検討し、「おたっしや健康手帳」は今後、「予防的対応」の一つのツールとしての活用が可能であることが示唆された。
12. 都市部ならびに農村部における地域在宅女性後期高齢者の栄養状態と生活環境についての検討(査読付)	共	2016年10月31日	日本家政学会誌 Vol.67(2)99-107	高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳子, 桐村ます美 85歳以上の後期高齢者における現状を把握した研究は少なく、また、農村部や都市部などの居住地域別に検討した研究調査はほとんど見られない。本調査は、京都府の農村部k t市(以下k t市)における要支援および要介護認定された地域在宅後期高齢者における3年間の栄養状態、身体機能、口腔機能、QOLの調査から、現状を把握し、効果的なサポートのための基礎資料を得るための調査をおこなった。
13. 在宅療養高齢者の栄養状態-多職種連携との関連-(査読付)	共	2016年05月26日	日本在宅栄養管理学会誌Vol.3(1)3-11	大塚理加 齋藤京子 前田佳子 他在宅療養高齢者を対象とした調査を実施し、多職種による医療・介護サービス提供と栄養状態との関連を検討した
14. 地域独居高齢者における介護予防に関する介入効果-全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動と有用性について-(査読付)	共	2012年12月	老年歯科医学27(3), 311-322	訪問歯科とリハ利用者に低栄養が少ないことが示された。また、誤嚥の有無により、サービスの栄養状態への影響に違いが認められた中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳子, 田中弥生, 谷野永和 咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、咬合力アップ運動を導入して、その効果とQOLの維持および向上を目指すことを目的とした。全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動により、介入2年後に介入群が非介入群に比べて握力、咬合力において有意に高値であったことから、介護予防を目指した高齢者の健康づくりに咀嚼力と咬合力の維持・向上を組み込んだ総合的な支援は、QOLの維持および向上に有用であることが示唆された。
15. 地域独居高齢者における全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動の効果と有用性について(査読付)	共	2012年08月01日	日本栄養士会雑誌 55(8)30-39	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳子 咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、70歳以上の独居高齢者へ咬合力アップ運動を導入して、その効果とQOLの維持および向上をめざすことを目的とした。全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動により、握力、咬合力、咀嚼力の現状維持が見られたことから、介護予防をめざした高齢者の健康づくりに咀嚼力と咬合力の維持・向上を組み込んだ総合的な支援は、QOLの維持および向上に有用であることが示唆された。
16. 在宅訪問栄養食事指導による栄養介入方法とその改善効果の検証(査読付)	共	2012年08月01日	日本栄養士学会雑誌55(8), 40-48	井上啓子, 中村育子, 高崎美幸, 前田玲, 齋藤郁子, 前田佳子, 田中弥生 在宅訪問栄養食事指導(訪問栄養指導)を広げていくために、管理栄養士がどのような訪問栄養指導を展開し、在宅高齢者の栄養素等摂取量や栄養状態がどのように改善するかを検討した。対象は訪問栄養指導を利用している62例とした。指導継続者は53例で、訪問栄

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
17. 糖尿病患者における栄養教育媒体の検討ーパンフレット・DVDを用いてー(査読付)	共	2012年04月10日	日本病態栄養学会誌15(1), 69-79	<p>養指導により3ヵ月後のエネルギー、たんぱく質などの栄養素等摂取量に有意差がみられ、それに伴い体重は有意に増加し、NMA、QOLおよびADLが有意に改善した。</p> <p>高橋志乃, 前田佳予子, 佐々木悠里, 瀬川早代, 松葉真, 北谷直美, 辻とも子, 大屋道洋, 清野裕</p> <p>糖尿病治療の基本は食事療法であり、QOLの維持・向上のため患者に自己効力感をおこさせる栄養教育が求められる。今回、教育媒体として、簡単に調理できる低カロリーメニューを記載したパンフレット及び調理実演を撮影したDVDを作製し、導入効果について検討することを目的とした。DVDを用いた群においてHbA1cに改善傾向がみられ、今後の調理に向けての積極的な姿勢などが得られたことから、視覚的に訴える教育媒体の有効性が示唆された。</p>
18. ケアマネジメントにおける訪問栄養食事指導の現状および問題点ー栄養ケア・ステーションの今後の展開ー(査読付)	共	2010年07月1日	日本栄養士会雑誌53(7), 22-30	<p>前田佳予子, 手嶋登志子, 中村育子, 田中弥生</p> <p>施率を上げるためには、管理栄養士の在宅に対しての意識向上および、利用者のケアプランを作成するケアマネジャーや主治医に訪問栄養指導の重要性を普及啓発することを目標とする必要がある。今回、我々は、訪問栄養指導を導入することにより効果があると多職種に理解されてもなぜ、実施率が低いのか、その原因を明らかにした。</p>
19. 高齢者の咬合力と食生活について(査読付)	共	2009年09月01日	保健の科学, 51(9), 635-639	<p>前田佳予子, 高橋志乃, 谷野永和</p> <p>高齢者において咬合力に影響を及ぼす要因について明らかにすることを目的とし、介護老人保健施設を利用している高齢者36人を対象に咬合力の測定と摂取可能食品に関するアンケート調査、食事調査を実施した。高齢者において残存歯数を多く残すことや生活活動量の増加が咬合力の維持に有効であり、咬合力を維持することにより、咀嚼難易度の高い食品の摂取が可能となると考えられる。</p>
20. 肥満症女性患者に対するストレスマネジメント併用による食事指導の意義(査読付)	共	2008年	肥満研究14(2), 136-144	<p>遠見 史子, 梅川 常和, 小暮 彰典, 前田 佳予子, 吉田 俊秀</p> <p>今回「ストレスマネジメント併用療法を、医師と管理栄養士の両者が併せ行うことにより、患者の精神面が補強されれば減量達成率は向上する」という仮説を立て検証した。対象は、肥満外来通院中の女性患者250名とした。医師と管理栄養士が併せ行う群では、ストレスのない群に匹敵する成績を示した。以上の成績は、我々の仮説が立証されたことを示している。</p>
21. 京都府W町における高齢者の食への取り組みのための地域診断結果ープリシード・プロシードモデルを活用してー(査読付)	共	2007年06月	日本家政学会	柴田亜樹, 松葉真, 石原領子, 前田佳予子
22. Inhibitory Effects of Orally Administered Green Tea on the Elevation of Blood Sugar in db/db Mice with Respect to Places of Production(査読付)	共	2005年01月	Medicine and Biology	<p>前田佳予子, 長谷川武夫</p> <p>産地別茶の糖尿病マウス(db/db mice)に対する血糖値上昇抑制作用について検討した。</p>
23. EFFECTS OF LONG-TERM ORAL ADMINISTRATION OF GREEN TEA CULTIVATED IN DIFFERENT DISTRICTS IN JAPAN ON BODY WEIGHT, BLOOD LIPID AND GLUCOSE LEVELS ON db/db MICE(査読付)	共	2005年	Journal of Food Biochemistry	KAYOKO MAEDA, TAKEO HASEGAWA, KOUSUKE MURABAYASHI, ATUSHI FUKUYAMA, and MICHIIRO OHYA

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
24. Non-Invasive Measurement of the Temperature Using Scanning Small Coils(査読付)	共	2004年12月	Japanese Journal of Hyperthermic Oncology	SATOSHI ANDO, HAJIME MONZEN, MORIKAZU AMANO, HIRONOBU ONO, TOMOAKI SUZUKI, KAYOKO MAEDA, ATSUSHI FUKUYAMA, TOHRU TAKAHASHI, ITSUO YAMAMOTO, TAKEO HASEGAWA 生体の温度を測る方法として、熱電対温度計がある。熱電対温度計を使う問題として、部分的な場所のみしか温度が測定できないこと、患者を大きく侵襲することがあげられる。そのうえ、ホットスポットを知ることができない。そこで我々はコイルを使って温度を測ることを研究した。本研究によって得られた結果は被加温体の電流密度を測定すれば、非侵襲的に温度が測定できることがわかった。
25. 産地別茶の経口投与による2型糖尿病マウスの体重抑制効果(査読付)	共	2004年09月	医学と生物学	村林甲介, 長谷川武夫, 鈴木郁功, 大屋道洋 産地別茶の糖尿病マウス(db/db mice)に対する体重抑制効果について16週間連続投与を行った結果, 静岡県産のお茶に体重抑制効果があった。
26. 高齢者糖尿病の食事療法(査読付)	単	2003年06月	Diabetes From Trier	
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 介護報酬改定動向からみた老健における管理栄養士・栄養士の役割	単	2023年6月14日	公益社団法人大阪介護老人保健施設協会	医療・介護報酬の同時改定が2024年に行われる。令和5年5月1日に管理栄養士・栄養士は、医療法で医療従事者となり、管理栄養士としての責任は大である。そのような中、
2. 地域高齢者における予防的対応の取組としての咬合カアツプ運動の効果	単	2019年10月24日	第78回日本公衆衛生学会総会	高齢者のQOL維持・向上の観点から口腔機能について検討することは重要である。高齢者が最期まで、自分の住み慣れた地域・場所で暮らすには、栄養と食事が鍵となる。そのためには、咬合力・咀嚼力は重要である。2009年から咬合カアツプ運動を維持することを目的に実施している効果について報告する。
3. 精神科領域における在宅生活QOLの向上に向けて～リエゾン管理栄養士の役割～	単	2018年10月26日	日本精神科医学会 学術教育研修会 栄養士部門	精神科領域の管理栄養士として、何故、今、在宅医療なのか、精神科領域における地域包括ケアシステムとして地域のなかでどのように関わっていくのかについて述べた。
4. 管理栄養士が歯科に期待するもの	単	2018年06月23日	老年歯科医学会	地域包括ケアシステムの一翼を担う在宅医療はかかりつけ医だけでなく歯科医師や歯科衛生士、管理栄養士などの多職種連携・協働によって提供されるのが理想である。特に在宅での歯科の介入は重要で、地域で口腔に問題がある人を医師が早期に歯科につないで歯科も含めて摂食嚥下評価を行い、きちんと口腔ケアとリハをして栄養管理ができるという地域システム作りを期待したい。
5. 在宅療養高齢者の栄養管理の現状～メタボからフレイル、看取り期へ～ 管理栄養士の立場から	単	2017年06月17日	第19回日本在宅医学会大会(名古屋)	シンポジスト在宅療養高齢者の栄養管理の現状～メタボからフレイル、看取り期へ～ 管理栄養士の立場から
6. 在宅医療現場での高齢女性へのケアと多職種連携ー管理栄養士の立場からー	単	2016年11月06日	第31回日本女性医学学会学術集会(京都)	シンポジスト在宅訪問管理栄養士が、在宅医療現場での高齢女性への栄養ケアの実態についての調査結果と女性介護者の介護上の問題と高齢女性の栄養ケアの実態と問題点について述べた。
7. これからの訪問栄養士 超高齢化社会に必要とされる在宅訪問栄養食事指導とその現状	単	2015年06月	日本在宅医療学会学術集会(東京)	シンポジスト
8. 在宅栄養管理の現状と課題ー在宅訪問管理栄養士の立場からー	単	2013年10月	第35回日本臨床栄養学会総会・第34回日本臨床栄養協会総会 第11回大連合大会	シンポジウム「在宅栄養管理の現状と今後の展開」シンポジスト
9. 在宅訪問栄養食事指	単	2013年09月	第59回日本栄養改	シンポジウム「地域医療と地域栄養の現状と課題」シンポジスト

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
導の現状と課題－在宅訪問栄養食事指導へのチャレンジ			善学会学術総会	
10. 栄養教育学・在宅栄養教育の立場から	単	2012年12月	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	パネルディスカッション「実践栄養学10年の変遷と未来」パネリスト
11. 第22回日本老年医学会近畿地方会 市民公開講座「高齢者のくらしと栄養」	単	2011年11月		地域高齢者の咬合力と介護予防のための栄養管理
12.3. ケア・マネジメントにおける訪問栄養食事指導の現状および問題点	単	2010年06月	第21回日本在宅医療学会学術集会	シンポジウム1「病院から在宅へ、嚥下・食事摂取の各職種の間わり」シンポジスト
2. 学会発表				
1. COVID-19感染前後における咬合力アップ運動実施による栄養状態・身体状況への効果	共	2023年9月2日	第76回日本栄養改善学会学術総会	田中龍舞、前田佳予子、北林珠奈 COVID-19感染拡大前後における地域後期高齢者の咬合力アップ運動実施による栄養状態・身体活動の効果について検討した。2019年度と2022年度の比較において、実践群は非実践群より握力、骨密度、咀嚼能力についてはコロナ禍においても維持されていた。握力、咀嚼能力は有意な差がみられた。実践群では食品摂取の多様性が高く、特に魚介類、肉類、卵類の項目で摂取率が増加していた。また、大豆・大豆製品、海藻類の項目はほとんど毎日食べる者の割合が増加していた。さらに、健康関連QOLでは、RP(日常役割機能 身体)、RE(日常役割機能 精神)、MH(心の健康)に有意な差あった。実践群はGH(全体的健康観)、SF(社会生活機能)以外の項目に増加傾向があった。
2. 終末期在宅療養者の食欲指数(SNAQ-JE)の実態に影響を与える因子についての検討	共	2023年7月15日	第10回日本在宅栄養管理学会学術集会	藤村真依、前田佳予子、濱田歩美、山崎千秋：終末期在宅療養者における食事関連QOLに関する研究の一つとしてSNAQ-JEを用いて終末期在宅療養者の食欲指数の実態と影響因子について調査した結果、管理栄養士が終末期と判断された早い時期から関わることで食欲の低下を防ぐことができる可能性が確認できた。
3. 地域後期高齢者におけるサルコペニアの可能性の有無による身体・栄養状態の関連について	共	2023年7月15日	第10回日本在宅栄養管理学会学術集会	田中龍舞、前田佳予子、藤村真依 地域在住後期高齢者に対し、要介護につながるフレイルの予防として、AWGS2019のサルコペニアの診断基準を用い、その可能性の有無と身体・栄養状態の関連性について検討した。サルコペニア可能性の有無について、なし群で運動実践者の割合が高い傾向が見られ、骨格筋量に有意差はみられなかったが、握力と下腿周囲長はなし群で有意に高かった。歯茎のやせについては、なし群で割合が低かった。また、MNAの果物・野菜の摂取では、毎日2品以上摂取する割合がなし群で高い割合であった。たんぱく質を多く含む食品群別割合については、魚介類、卵類、牛乳・乳製品、大豆・大豆製品ではあり群、なし群との間に有意差は見られなかったが、肉類はなし群で摂取頻度が有意に高い傾向が見られた。
4. 終末期在宅療養者の食支援介入効果についての検討		2023年6月24日	第5回日本在宅医療連合学会大会	藤村真依、前田佳予子、井村龍磨、濱田歩美、山崎千秋、森岡恵美：終末期療養者に対し、最期まで口から食べることを支援する管理栄養士の食支援介入効果の有無について検討し、管理栄養士が介入することで、摂取栄養量をアップしておくことにより、その後の体力やQOLの維持につながる事が明らかになった。
5. 終末期在宅療養者の食支援介入効果についての検討	共	2023年6月24日	第5回日本在宅医療連合学会大会	濱田歩美、前田佳予子、井村龍磨、藤村真依、山崎千秋、森岡恵美、中井由加里：管理栄養士における居宅療養管理指導は、在宅療養者を対象としているが、現実的には管理栄養士が配置されていない居住系施設での食支援も重要である。今後、居住系施設で最期まで口から食べることを支援することが求められ、特に認知症が重度でかつ介護が必要な高齢者への管理栄養士の介入は重要不可欠であることが明らかになった。
6. 終末期の療養者に対する在宅訪問栄養食事指導の介入効果	共	2023年6月24日	第5回日本在宅医療連合学会大会	中村育子、前田佳予子、田中弥生：年々増加する終末期の在宅療養者に対して最期まで口から食べることを支援する在宅訪問栄養食事指導の介入効果を明らかにした。特に管理栄養士が介入することで

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. 地域高齢者のサルコペニアの可能性及び運動実践の有無と身体・栄養状態の関連について	共	2022年10月9日	第81回日本公衆衛生学会総会	介護者の食事作りの負担改善と療養者のQOLの向上がみられた。田中龍舞、前田佳予子、芝崎美幸：サルコペニア可能性のある高齢者に咬合力アップ運動実践の有無と栄養状態について検討した結果、サルコペニアの可能性のある人は、嚥下機能、咀嚼能力が低下し、今後、食欲不振を引き起こす可能性が多いことが分かった。
8. Activities of home-visiting registered dietitians during the COVID-19 pandemic	共	2022年8月20日	The 8th Asian Congress of Dietetics Yokohama Japan	To investigate changes in the number of visits by home-visiting registered dietitians after the COVID-19 pandemic, as well as alternative methods of support for nutritional guidance at home and challenges during visits.
9. Training of registered dietitians to provide home-visit nutritional and dietary guidance in Japan	共	2022年8月20日	The 8th Asian Congress of Dietetics Yokohama, Japan	To provide nutritional guidance at patients' homes, and achieve sufficient outcomes, interprofessional collaboration is required. Therefore, this paper reports a system to train registered dietitians specializing in home-visit nutritional and dietary guidance.
10. 終末期の在宅高齢者における食支援のあり方と課題への探索	共	2022年7月18日	第9回日本在宅栄養管理学会(札幌)	藤村真依、前田佳予子、濱田歩美、山崎千秋：終末期の在宅療養者の支援を行う上で管理栄養士として食支援のあり方と課題について検討した結果、終末期における男性介護者では「調理支援」のニーズが高いという結果が得られた。また、終末期の療養者の食事形態や内容を配慮しながら食支援することは、本人のみならず家族の満足度は高かった。
11. 地域後期高齢者の運動実践における身体・栄養状態の関連について	共	2022年7月18日	第9回日本在宅栄養管理学会学術集会 札幌	田中龍舞、前田佳予子：地域後期高齢者の咀嚼能力と運動関連性に着目し、コロナ禍における咬合力アップ運動実践の有無と身体及び栄養状態の関連について検討した結果、運動実践群は非実践群より握力、下腿周囲長、上腕周囲長は、コロナ禍でも維持できており、嚥下の状態も良好であった。
12. 都市部と農村部における地域在住男性高齢者の栄養状態と生活環境についての検討	共	2021年12月4日	第37回兵庫県栄養改善研究発表会	片岡文乃、前田佳予子、山野葉子：都市部と農村部の通所介護施設を利用する男性における居住地域の違いから見た栄養状態および生活環境について現状を把握した結果、都市部の高齢者が栄養状態が悪く、食事内容がこうれ者の口腔状態に合っていないことが、栄養上田が低下した原因の要因の一つであることが明らかになった。
13. 地域独居高齢者に対する咬合力アップ運動の5年間継続による身体的変化についての報告	共	2020年12月4日	第37回兵庫県栄養改善研究発表会	山野葉子、前田佳予子、片岡文乃：兵庫県N市N地区で2009年から2014年の5年間ADLに制限のない独居高齢者を対象にふれあい昼食会後に咬合力アップ運動をじっししているが、運動実践群の方が栄養状態および口腔機能を高値に維持ができており、QOLの向上に大きな差がみられた。
14. 配食サービスを利用する地域在住高齢者における口腔機能からみた関連要因の検討	共	2020年9月3日	第67回日本栄養改善学会学術総会	片岡文乃、前田佳予子、山野葉子 配食サービスを利用する高齢者の咀嚼能力からみた関連要因について検討し、地域在住高齢者のよりよい食支援を行うための基礎資料を得ることを目的に配食サービスを利用している地域在住高齢者16人を対象とし、咀嚼能力が良好な者(良好群)と不良な者(不良群)の2群間における検討を行った。良好群は単独世帯が多く通所介護施設を利用していないなどの会話や人とのコミュニケーション不足が考えられた。
15. 地域高齢者における全身運動を含む咬合力アップ運動のフレイル予防としての有用性	共	2019年10月24日	第78回日本公衆衛生学会総会	芝崎美幸、前田佳予子、山野葉子 運動が加齢による筋力の維持、咬合力の低下を緩やかにし、咀嚼力は維持・向上が認められた。また、良好な栄養状態を維持し、体力の維持がで、全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動の継続はフレイル予防として期待できる。
16. 地域高齢者における予防的対応の取り組みとして咬合力アップ運動の効果についての検討	共	2019年10月24日	第78回日本公衆衛生学会総会	山野葉子、前田佳予子 地域高齢者に全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動は、加齢に伴う口腔機能及び食欲の低下を緩やかにすると考えられ、咀嚼能力が高いほど食品の多様性があることが示唆されたと同時に咬合力アップ運動は、独居高齢者の引きこもり予防だけではなく、社会参加の場になることがいえる。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
17. 地域高齢者における予防的対応の取り組みとしての咬合力アップ運動の効果について	共	2018年10月26日	第77回日本公衆衛生学会学術集会	山野葉子, 前田佳予子 独居高齢者に対し全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動は、口腔機能の維持・向上に効果があることが言えた。栄養教育として、月2回の栄養コラム「お便り」は情報アクセスのための整備の一環となり、食に対する意識の違いを生じさせたと考えられた。咬合力アップ運動は、サルコペニア・フレイルの予防的対応として有効的であると推察され、かつ継続することの重要性が示唆された。
18. 地域高齢者における咬合力アップ運動のオーラルフレイル予防としての有用性について	共	2018年10月24日	第77回日本公衆衛生学会	芝崎美幸, 前田佳予子, 山野葉子, 高橋志乃 兵庫県N市N地区の「ふれあい昼食会」参加者に全身運動を含む咬合力アップ運動は、加齢による咬合力の減少を緩やかにとどめ、握力、咀嚼力においては維持、向上が認められた。咬合力アップ運動はオーラルフレイル予防として期待できる。
19. 地域高齢者における継続的な予防的対応（咬合力アップ運動の8年継続）の取り組みの評価	共	2017年09月	第64回日本栄養改善学会学術総会(徳島)	前田佳予子, 山野葉子, 高橋志乃咀嚼力アップ運動では口腔機能の維持・向上に効果がみられた。ミニ栄養講座では食環境における食物アクセスや情報アクセス面で効果があったと思われる。また、ふれあい昼食会や公民館への外出が社会参加の機会となっていることから咀嚼力アップ運動はサルコペニアやフレイルの予防的対応としての効果があると示唆された。
20. 地域在住高齢者における食環境整備の在り方に関する検討-配食サービスの現状と課題-	共	2017年07月	第5回日本在宅栄養管理学会 (東京)	高橋志乃 田中弥生 前田佳予子 近年、高齢化が急速に進むわが国において、高齢者が住み慣れた地域で健康を維持し、生活していくうえで食生活支援方法を整えていくことは重要な課題の一つである。配食サービスは食の調達が難しくなる高齢者の為の食事や栄養素の供給源として有用である一方、配食サービス開始時に利用者の状態把握が不十分であることや、利用者に応じた食提供が不十分であることが課題として挙げられている。そこで本研究は、食生活支援の一つである配食サービスに焦点を当て、配食サービスの現状、利用者の要望ならびに意識について検討することを目的とした。
21. 精神科において高齢者の咀嚼力向上を目的とした取り組み	共	2017年02月23日	第32回日本静脈経腸栄養学会(岡山)	加齢に伴う身体的問題の出は避け難いものであるが、本人の意識に変容を求め、他職種がチームで継続的にかかわることが、一旦停止した咀嚼力も維持向上することが可能であることが示唆され、予防改善に有用な手段となり得るものと考えられる。
22. 在宅療養高齢者の栄養状態・摂食状況について	共	2016年06月	第4回日本在宅栄養管理学会(西宮市)	大塚理加 齋藤京子 前田佳予子他 栄養状態は、在宅療養高齢者の健康に重要である。だが、我が国においては、在宅療養高齢者の健康、特に栄養状態の調査は数多くは行われていない。そこで本研究では、医療系の訪問サービスを受けている在宅療養高齢者の栄養状態と摂食状況の関連を明らかにすることを目的とした。在宅療養高齢者の栄養状態の維持・向上には、経口摂取が必要である。そのためには、嚥下機能が重要であり、在宅高齢者の嚥下機能や口腔状態に配慮した食事の提供が必要となる。
23. 都市部ならびに農村部における地域在宅後期高齢者(女性)の栄養状態と生活環境の現状についての検討	共	2015年09月26日	第62回日本栄養改善学会学術総会 福岡国際会議場	高橋志乃 中村早緒里 前田佳予子 わが国の高齢化率は、年々増加しており、地域在宅高齢者が自立した日々の生活を支えるための、より効果的なサポートには、高齢者の栄養状態ならびに身体機能と併せて、高齢者の意欲や取り囲む環境の違いについても検討することが重要であると考えられる。本調査は地域在宅後期高齢者(女性)を対象に、現状を把握し、より効果的なサポートのための基礎資料を得ることを目的とした。高齢者の健康を支える要因は、栄養状態、身体状況、社会的要因、精神的健康度など多岐にわたり、それぞれ関連をもつことから、対象者のニーズに応じた多様な面から、高齢者を支援することの重要性が示唆された。
24. 地域高齢者(都市部)における咬合力と食生活の関連について	共	2015年09月	第62回日本栄養改善学会学術総会(福岡国際会議場)	前田佳予子, 高橋志乃, 中村早緒里 食べることは、QOLの向上や身体的に健康な状態を維持するための基本的な活動であるだけでなく、高齢期では、生きがいや介護予防、介護の重症化予防の上から「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、都市部の高齢者において咬合力や咀嚼力の違いが食生活およびQOLに影響があるのかについて調査を行った。高値群は咀嚼能力が低値群よりも高い値を示し、入れ歯使用者の割合が少なかった。このことより、食事内容が充実することが、栄養状態に関与していると考えられる。よって、咬合力の割合が高いと

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. 地域高齢者における全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動の効果と介護予防の有用性	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	口腔能力・栄養状態が良いと推測された。 芝崎美幸, 高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 高齢者の介護予防に関して運動器機能向上・維持だけではなく、口腔器機能向上・維持も期待できる咬合力アップ運動の方法と有用性を検討した。2009年から2013年にかけて地域の昼食会の後に行われる運動に継続参加している介入群と、参加していない対照群を比較した。介入5年を経て、介入群は握力の変化量が増加したのに対し、対照群は低下した。咬合力については両群ともに低下していたが、介入群のほうが低下は緩やかであった。咬合力アップ運動へ参加することは社会参加のきっかけを与え、「閉じこもり予防・支援」も期待できることばかりでなく介護予防においても有用性があると示唆された。
26. 在宅療養高齢者の栄養状態 (BMI) は1年後の生命予後に影響を及ぼすか？	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	齋藤京子, 大塚理加, 前田佳予子 在宅療養高齢者において生活の質の向上のために、栄養状態と身体機能は重要である。そこで、在宅療養高齢者の栄養状態を把握する指標の1つである体格指数(BMI)と1年後の生命予後との関連について検討した。対象者は在宅で診療または訪問対応した65歳以上の在宅療養高齢者で、最終的な解析対象者は771名である。ベースライン時のBMIカテゴリー別にみた1年後の死亡のオッズ比により、在宅療養高齢者のうちBMIが低い者は1年後の死亡に影響を与えている可能性があることが示唆された。
27. 京都府に居住する高齢者のMNA分類による栄養状態と咀嚼能力の関連について	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、京都府の都市部ならびに農村部における介護保険利用者に対して、栄養評価と咀嚼能力の関連について検討した。2011年から2013年の3年間に京都府k・t市の4施設に通所する65歳以上の女性高齢者を対象に調査を行った。対象者をMNA分類による低栄養のリスクあり群とリスクなし群に分類した。リスクなし群で握力、咀嚼力、咬合力の値が大きくなる傾向がみられ、咀嚼能力と栄養状態は関連があると推測される。
28. 地域高齢者における全身運動を組み込んだ咀嚼力アップ運動の効果と介護予防の有用性	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 高齢期における咀嚼力アップに伴うQOL維持・向上を目指すことを目的とし、咀嚼力アップ運動を導入し効果を検討した。2008年から2013年の5年間N市N地区の昼食会と咀嚼力アップ運動に参加する9人を介入群、昼食会のみ参加する23人を対照群とした。介入群で咬合力・咀嚼力・握力の維持および向上が見られ、SF-8の精神的サマリースコアも高値であった。咬合力アップ運動は口腔機能の維持や向上のみならず、QOLの向上を図り介護予防に有用であると示唆された。
29. 地域在宅高齢者（都市部）における栄養状態と食生活習慣の関連について	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	前田佳予子, 中村早緒里, 高橋志乃, 桐村ます美 高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについての調査を行った。2010年から2013年の4年間に京都市のN施設に通所し、介護保険を利用する高齢者を対象に調査を実施した。また、継続調査が可能であった13名についても検討を行った。MNA分類の栄養状態の割合の推移に変化はみられなかった。握力、咬合力は年々低下傾向であったが、咀嚼力は良くなっており、継続調査の13名もほぼ同様の結果がみられた。
30. 地域在宅高齢者（農村部）における4年間の栄養状態と食生活習慣の継続的変化について	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	高橋志乃, 桐村ます美, 前田佳予子, 中村早緒里 高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、農村部における介護保険利用者の栄養状態や食生活習慣の4年間の継続的変化についての調査を行った。2010年から2013年の4年間に京都府k・t市の介護保険利用者で4施設に通所する65歳以上の高齢者を対象に調査を行った。同時に4年間継続調査ができた9名についても検討を行った。継続調査者は咬合力、握力に大差がなく、咀嚼力が良好であったことから、栄養状態を比較的維持できていたと考えられる。
31. 地域在宅高齢者（農	共	2014年09月	第61回日本栄養改	桐村ます美, 中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
村部)における栄養状態と食生活習慣の関連について			善学会学術総会	高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについて調査を行った。2013年8月上旬に京都府K・T市の介護保険利用者で4施設に通所する65歳以上の高齢者122名を対象に調査を実施した。栄養状態リスクなし群において咬合力が高値であった。栄養状態リスクなし群は、三世帯世帯が多く、食事での会話があり、食事を美味しいと感じていることから、食環境が栄養状態に影響することが推察される。
32. 地域高齢者における咬合力アップ運動の効果と介護予防の有用性について	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 今回、介護予防に関する介入効果として、咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、咬合力アップに伴うQOL維持および向上を目指すことを目的として、咬合力アップ運動を挿入し、その導入効果を検討した。運動介入群は咀嚼能力が維持できており、食品選択の幅が広がり、比較的栄養状態が良好であると考えられる。また、健康関連尺度(SF-8)の精神的サマリースコアにおいて有意差があったことから、咬合力アップ運動は口腔機能の向上だけでなく、QOLの向上を図り、介護予防においても有用性があると示唆された。
33. 訪問栄養食事指導における栄養介入効果の検討	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	大上恵理, 高橋志乃, 前田佳予子, 田貝泉 急速に進展する高齢化の中、在宅医療の進展が表明され、ケアの場が病院等の施設から地域へと移行してきている。それに伴い、管理栄養士による訪問栄養食事指導の必要性が言われている。そこで、我々は訪問栄養食事指導による栄養介入を行うことで、対象者の栄養状態にどのような影響をおよぼすのかを検討した。我々の調査では、訪問栄養食事指導の導入により栄養状態は改善したと考えられる。また、バーセルインデックス、SF-8の値も向上したことから、訪問栄養食事指導は栄養状態だけでなく、身体活動、精神状態にも寄与すると考えられる。
34. アメリカンフットボール部の食事状況について～高校生と大学生の違いについて～	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	松葉真, 藤田和代, 高橋志乃, 前田佳予子, 松葉圭子, 油谷浩之 K大学・K高校アメリカンフットボール部選手の食事摂取について検討し、各ステージにおける適切な食事摂取を目指すために、食事調査およびアンケートを実施した。高校生は、主食量が多くビタミンB群の摂取が低いことエネルギーの変換効率が悪いことが示唆された。高校生に比べて、大学生は手軽に食べられる食品で食事を済ませているため、プラス1品料理提示が必要とされる。食品の購入時に、栄養成分表示を見る割合は、高校生で4割に満たなかったため、中学や高校入学時に栄養成分表示を確認して購入する習慣づけを行う必要があると考えられる。
35. 在宅訪問栄養食事指導の課題－在宅訪問管理栄養士へのアンケート結果から－	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	井上啓子, 前田佳予子, 中村育子, 田中弥生 2011年度より公益社団法人日本栄養士会・全国在宅訪問栄養食事指導研究会認定の「在宅訪問権利栄養士」の制度がスタートし、2012年度は193名の認定者が誕生した。この認定者を対象に認定のための実践レポート作成とその後の訪問栄養食事指導活動についてのアンケートを実施したのでそこから見えてくる課題や問題点を報告する。本認定制度の課題として、在宅訪問栄養食事指導の認知度を高める活動や実践活動の効果の検証、在宅訪問管理栄養士のスキルアップ研修の実施など早急に取り組む課題が明らかになった。
36. 統合失調症患者への噛むことの意識づけとマスティノート導入による早食いへの改善効果	共	2014年01月	第17回日本病態栄養学会年次学術集会	高橋志乃, 榎本ゆり子, 井戸由美子, 前田佳予子 統合失調症の誤嚥・窒息に関する疾患の予防の必要性が指摘されている中、統合失調症の多くには「早食い」という食行動の問題がある。2009年より、我々は食事中に音楽や意識づけ等を導入して、4年目の「早食い」の改善効果ならびに、介入媒体としてマスティノートの効果について検討をした。噛むことの意識づけの導入をして4年目になるが、介入前と比べて、食事時間の延長がみられ、咀嚼能力は横ばい状態であるということは、ある程度の効果があったと考えられる。
37. 大阪・京都府下の精神科デイケア通所者における咀嚼機能改善プログラムの実施	共	2013年11月	第2回日本精神科医学会学術大会	榎本ゆり子, 高田香, 増子美佐, 井戸由美子, 安田章子, 亀田清子, 前田佳予子, 高橋志乃

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
38. 在宅療養高齢者における食欲と栄養状態の関連について	共	2013年10月	第35回日本臨床栄養学会総会・第34回日本臨床栄養協会総会 第11回大連合大会	大塚理加, 齊藤京子, 葛谷雅文, 前田佳予子, 三浦久幸 食欲の不振は、体重減少や栄養状態の悪化につながる。特に、疾患があり、在宅で療養している高齢者にとって、食欲の有無はQOLにも、身体状況にも関連すると考えられる。しかし、これまで我が国の在宅療養高齢者における検討はなされていない。そこで、本研究では食欲と栄養状態について、在宅療養高齢者の実態を示すとともに、その関連について検討する。本研究の結果から、栄養状態と食欲との関連が認められた。今後は、疾患や摂食状況等の食欲への関連要因を統制した分析を行い、食欲と栄養状態の関連について、さらに検討を進めたい。
39. 兵庫県内の在宅高齢者における介護予防に関する介入効果	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	前田佳予子, 高橋志乃 近年、国は介護予防に力を入れており、地域在宅高齢者においても、様々な研究がなされている。今回、介護予防に関する介入効果として、咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、咬合力アップに伴うQOL維持および向上を目指すことを目的として、咬合力アップ運動を導入し、その導入効果を検討した。N市における全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動介入は咬合力、咀嚼力および握力の維持や向上がみられたことから高齢者の健康づくりに運動介入は効果があると考えられた。
40. 地域在宅高齢者（都市部）における栄養状態と食生活習慣の関連について	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	高橋志乃, 桐村ます美, 前田佳予子 高齢期では、生きがいや介護予防、介護の重症化予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについて、2012年5～7月にk市に居住する介護保険利用者44名を対象に調査を行った。MNA分類による低栄養のリスクなし群は体重、BMI、咬合力、握力が高い傾向であった。また、健康関連QOLも高いことから、栄養状態や健康関連QOLを良好に保つことができていると推測された。
41. 地域在宅高齢者（農村部）における栄養状態と食生活習慣の関連について	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	桐村ます美, 高橋志乃, 前田佳予子 高齢期では、生きがいや介護予防、介護の重症化予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについて、2012年8月上旬に京都府K・T市の介護保険利用者で4施設に通所する65歳以上の高齢者124名を対象に調査を行った。咀嚼能力が強いと握力も強くなるといわれているが、我々の調査においても、MNA分類による栄養状態リスクなし群が、栄養状態リスクあり群に比べ、咀嚼力、咬合力が高い値の傾向を示し、握力も強い傾向であった。
42. 大学アメリカンフットボール部員の食事対策について～レギュラー選手とサブ選手の比較～	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	藤田和代, 高橋志乃, 前田佳予子, 松葉圭子, 油谷浩之, 松葉真, 油谷浩之, 松葉真 2012年8月より、K大学アメリカンフットボール部員1～4年生の同意を得た合計122名を対象に、合宿時のレギュラー選手とサブ選手の食事や練習での取り組みの差がみられたことから、精神・疲労状態や食事調査の分析を行った。POMS調査でレギュラー選手に比べ、サブ選手では、合宿後に「緊張・不安」が高かった。レギュラー選手はサブ選手よりも合宿前後で「活力」が高かった。主食類の摂取が多い理由としてポジション別・学年別のPOMS調査でも比較してみると「緊張・不安」の値が2年生で一番低く食事面に対してのプレッシャーも高いと考えられる。
43. 統合失調症患者の噛むことの意識づけを継続することによる早食いへの改善効果	共	2013年01月	第16回日本病態栄養学会年次学術集会	前田佳予子, 高橋志乃, 中村早緒里, 井戸由美子, 榎本ゆり子 統合失調症の多くには「早食い」という食行動の問題がある。2009年より、我々は食事中に音楽や意識づけ等を導入して、3年目の「早食い」の改善効果について検討した。噛むことの意識づけの導入をして3年目になるが、食事時間が延長し、咬合力、握力が介入前を比べて、ほぼ横ばい状態であるということは、ある程度の効果があったと考えられる。
44. 兵庫県内の地域在宅	共	2012年12月	第11回日本栄養改	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子, 福尾恵介, 谷野永和

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
高齢者における介護予防に関する検討			善学会近畿支部学術総会	現在、各地域で地域高齢者を対象にボランティアが中心となって様々な助成事業が行われているが、ボランティアの高齢化や補助金等の問題がある。今回、身体計測等を行い、地域在住高齢者の現状を知り、今後の助成事業についての検討を行うことを目的とした。今後、ボランティアの負担が少ない助成事業へと移行し、その中で運動や音楽、学生が中心となった世代間交流等を取り入れ、介護予防にもつながる活動を同時行っていく必要があると思われる。
45. 在宅高齢者の療養食提供に対する訪問介護員の意識と共働への課題	共	2012年12月	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	時岡奈穂子, 中村早緒里, 高橋志乃, 加川稚佳子, 前田佳予子 在宅高齢者が、今後ますます増加する傾向にあり、各種の療養食を必要とする者も増加すると推察される。今回、療養食提供に対する訪問介護員の意識を把握し、協働における課題とニーズを把握する事を目的とし調査を行った。栄養士の積極的な関わりは、疾病の改善のみに留まらず、介護者の負担軽減、充実したケアの提供につながると推測される。
46. 咬合力アップ運動の介入効果と有用性について	共	2012年10月	第71回日本公衆衛生学会総会	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 介護予防の支援を目指して咬合力アップ運動の効果および咬合力アップに伴うQOLの維持と向上を目指して介護予防の要因を明らかにするために運動介入効果が有用であるかどうかを検討する。地域高齢者において、咬合力アップ運動は、咬合力の維持・向上に効果があると推察された。介護予防を目指した高齢者の健康づくりに咀嚼力や咬合力の維持および向上を組み込んだ運動介入効果は有用であると考えられた。
47. デイケア通所者における咬合力に関する意識調査	共	2012年10月	第1回日本精神科医学会学術大会	片平有美, 田中遥佳, 辻川侑子, 河崎建人, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 前田佳予子 デイケア通所者に対し咬合力の実態調査を行い、リスクを把握した後、誤嚥を予防する取り組みを6ヶ月行い、アンケートによる意識調査を行った。握力、咬合力は全国の同年代の平均値と比べて低かった。アンケート結果から、食事に対する全体の大きな意識の変化はなかった。今後はプログラムの見直しを行い、利用者自身が、食事を安全に楽しむために自分で気をつけることが大切であると理解できる支援を継続して提供していく必要がある。
48. 医療から介護における栄養管理ツール（栄養手帳）のネットワーク形成の有用性の検討	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	工各関連機関が支援方針等の情報を共有するための栄養管理ツール（栄養手帳）を作成しその社会ネットワークの共有化を検討した。今回の活動を通じて、栄養管理ツールの活用について一定の意義が見出されたが、栄養管理ツール自体がネットワーク形成等に有効に活用されているかは長期間でみる必要がある。しかし管理栄養士が訪問することで食事について関心を持ち、家族や支援者との情報共有が密になったといえる。藤美香, 田中弥生, 前田佳予子, 松崎政三, 高橋史江
49. 在宅訪問栄養食事指導による栄養介入効果の検証	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	井上啓子, 中村育子, 高崎美幸, 前田佳予子, 田中弥生 在宅訪問栄養食事指導を実施している管理栄養士は、どのような訪問栄養食事指導を展開し、それにより、在宅療養者の栄養摂取状況や栄養状態がどういった状態にあるかを検討した。対象は全国在宅訪問栄養食事指導研究会の会員が訪問栄養食事指導を実施している在宅療養者62例とした。在宅訪問栄養食事指導により、在宅療養者の栄養摂取量を有意に増加させ、体重などの栄養指標、QOLおよびADL有意に改善させることができた。
50. K市に居住する高齢者の咬合力分類による咀嚼能力と栄養状態の関連について	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 K市に在住するデイサービス利用者（介護保険利用者）で調査に同意の得られた72名を対象に、握力、咬合力、色変わりガムを用いた咀嚼能力の測定を行った。本研究では、咬合力高値群において、握力および咀嚼能力が咬合力低値群よりも高くなる傾向が伺えた。なお、MNA分類において咬合力高値群が栄養状態良好を示す傾向がみられたことから、咬合力は口腔機能だけでなく栄養状態にも関連があると推察された。
51. 京都府下に居住する高齢者の咬合力と食生活習慣の関連について	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	桐村ます美, 高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 K・T市の介護保険利用者で4施設に通所する高齢者で、調査に同意を得られた99名の対象者に咬合力、咀嚼力、握力の測定及び、食生活状況調査を行った。咬合力が強いと握力、咀嚼力ともに高値を示し

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
52. 在宅高齢者の食事療養環境の整備について～訪問介護員との共働事例～	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>た。食生活状況調査では、咬合力高値群と咬合力低値群の食事での会話の有無、食べられる食品の硬さに差が見られたことにより、世帯構成の違い等によって咬合力に影響を与えていることが推測された。</p> <p>時岡奈穂子, 中村早緒里, 高橋志乃, 加川稚佳子, 前田佳予子</p> <p>在宅高齢者の増加とともに療養食利用者は今後増加すると思われるが、そのフォロー体制は完全とは言い難い。食事療養の環境を整える取り組みを訪問介護員と共働で行い、その課題とニーズを把握する事を目的とし調査を行った。訪問介護員の持つ知識と技術を栄養士がサポートすることにより、効果的な療養食の提供が可能と考える。栄養士の積極的な関わりによって、疾病の改善のみに留まらず、充実したケアの提供につながると推測された。</p>
53. 大学アメリカンフットボール選手の夏季合宿の食事対策について	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>藤田和代, 高橋志乃, 前田佳予子, 松葉圭子, 油谷浩之, 松葉真</p> <p>毎年K大学アメリカンフットボール部の夏季合宿では、選手の基礎体力の向上と秋季リーグ戦に向けてのシュミレーションを行っている。2011年度と2010年度に得たアンケート結果をもとに、夏季合宿中の朝食献立の更なる改善とミネラルを多く含むクラッシュゼリーの提供を行った。夏季合宿中だけでなく試合期の練習および試合前やハーフタイム中にもクラッシュゼリー提供することを念頭に入れてチームと調整していきたい。</p>
54. 統合失調症におけるメタボリックシンドローム対策と認知行動療法による栄養指導の成果	共	2012年01月	第15回日本病態栄養学会年次学術総会	<p>井戸由美子, 中村友紀, 田頭優, 佐谷誠司, 岡村武彦, 前田佳予子</p> <p>統合失調症患者は身体脆弱性や薬剤の副作用のより、メタボリックシンドロームに罹る危険性が高いといわれている。我々は2002年に、多職種協働による栄養指導などの認知行動療法プログラムをNSTで取り組んできた結果、栄養管理の継続や栄養状態の改善・維持が可能になったので報告する。患者の社会的背景を踏まえた上で個別的且つ包括的に支援できる多職種協働による栄養改善のための認知行動療法が有効であると考えている。</p>
55. 大阪府下の統合失調症患者における咀嚼機能評価のフローチャート実用化に向けての検討	共	2012年01月	第15回日本病態栄養学会年次学術総会	<p>前田佳予子, 高橋志乃, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 畔上多恵子, 西田和美</p> <p>今回、我々は咀嚼能力の指標である咬合力と色変わりチューインガム法から評価して現状の把握を行い、フローチャートを作成した。咬合力と色変わりガム法によるb*値の咀嚼機能評価のフローチャート作成により、実践の場において情報の共有を行うことで、精神デイケア職員が統合失調症患者の誤嚥・窒息を未然に防ぐことができると考えられた。</p>
56. 統合失調症患者の噛むことの意識づけによる早食いへの改善効果	共	2012年01月	第15回日本病態栄養学会年次学術総会	<p>高橋志乃, 前田佳予子, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 中村早緒里, 畔上多恵子, 西田和美</p> <p>統合失調症患者の多くには「早食い」という食行動の問題がある。2009年より、我々は食事中に音楽や意識づけ等を導入することで「早食い」の改善効果について検討した。対象者の平均デイケア利用年数は長期で、社会的な刺激も少なく、陰性症状やホスピタリズムなど意欲減退傾向にある患者が多くみられる。食事を「単に食べる食事」から「ゆっくり楽しみながら食べる」BGM介入や声かけて食事摂取時間が延長したと考えられる。</p>
57. 京都府に居住する高齢者のMNA分類による栄養状態と咀嚼能力の関連について	共	2011年10月	第70回日本公衆衛生学会総会	<p>高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子</p> <p>本研究では、地域高齢者に対して簡易栄養状態評価表による栄養評価と、咀嚼能力との関連について検討を行なった。栄養状態良好群で握力・咬合力・咀嚼力が高値であったため、この3点も栄養状態に関連があると考えられた。また、栄養状態良好群において主観的口腔状態が良好であったことより、口腔機能の維持が栄養状態の低下を防ぐことが示唆された。</p>
58. 地域高齢者における咬合力アップ事業の効果と有用性について	共	2011年10月	第70回日本公衆衛生学会総会	<p>中村早緒里, 前田佳予子, 高橋志乃</p> <p>介護予防の支援を目指して咬合力アップ運動の効果と咬合力アップに伴うQOL維持・向上を目指して介護予防の要因を明らかにするために運動が有用であるかどうかを検討した。地域高齢者において、咬合力アップトレーニングは、咬合力の維持・向上に効果があると推察された。介護予防を目指した高齢者の健康づくりに咀嚼力・咬合力の維持・向上を組み込んだ総合的な支援事業は有用であると考え</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
59. ふれあい昼食会参加ひとり暮らし高齢者の身体計測値と喫食記録の関連	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学会学術総会	られた。 谷野永和、横溝佐衣子、山本遥菜、前田佳予子、堀内理恵、福尾恵介 ひとり暮らし高齢者の身体状況を調査し、その結果簡便なカレンダー方式での食事喫食記入による身体状態との関連を検討した。ひとり暮らし高齢者においては加齢にともない体重、骨密度は減少率が高くなるが、握力は関連を示さなかった。簡便なカレンダー方式での喫食記録は、回答率の高い群、喫食率の高い群とも体重、BMI、握力との関連が推察され、低栄養予防のツールとして効果が期待できる。
60. アメリカンフットボール部夏季合宿時の食事改善の対応について～アンケート結果を用いた一考察～	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学会学術総会	藤田和世、高橋志乃、前田佳予子、松葉圭子、油谷浩之、松葉真 K大学アメリカンフットボール部1～4年生の138名を対象者とし、2010年8月10日～14日に実施された夏季合宿で提供した朝食およびクラッシュゼリーについて、後日アンケート調査による評価を行なった。従来の朝食の問題点より、今回は丼類に具だくさんの汁物を付けた形で提供した。ゼリーの摂取方法や提供時間では良い数値が得られた。更なる改善に向けて、少数意見も加味し次年度以降もサポートを行う予定である。
61. 地域高齢者における咬合力アップ事業の効果と有効性について	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学会学術総会	中村早緒里、高橋志乃、前田佳予子、松葉真、谷野永和 介護予防の支援を目指して咬合力アップ運動の効果と咬合力アップに伴うQOL維持・向上を目指して介護予防の要因を明らかにするために運動が有用であるかどうかを検討した。地域高齢者において、咬合力トレーニングは、咬合力の維持・向上に効果があると推察された。介護予防を目指した高齢者の健康づくりに咀嚼力・咬合力の維持・向上を組み込んだ総合的な支援事業は有用であると考えられた。
62. K市に居住する高齢者のMNA分類による栄養状態と咀嚼能力の関連性について	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学会学術総会	高橋志乃、中村早緒里、前田佳予子 本研究では、地域在宅高齢者に対して簡易栄養状態評価表による栄養評価と、咀嚼能力との関連について検討を行なった。対象者を栄養状態別にリスクなし群とリスクあり群に分類した。リスクなし群で握力・咬合力・咀嚼力が高値であったため、この3点も栄養状態に関連があると考えられた。また、リスクなし群において主観的口腔状態が良好で、口腔機能の維持が栄養状態の低下を防いだ。
63. K・T市に居住する高齢者のMNA分類による栄養状態と咀嚼能力の関連性について	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学会学術総会	前田佳予子、高橋志乃、桐村ます美、中村早緒里 栄養状態や生活状況の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについて今回、調査を行なった。簡易栄養状態評価を用いて、対象者をリスクあり群とリスクなし群に分類した。介護保険利用者のリスクなし群は、リスクあり群より、握力、咬合力、咀嚼力の全ての項目で高い傾向にあった。
64. 大阪府下の精神科デイケア通所患者における咀嚼機能評価の変化について（第2報）	共	2011年07月	第39回日本精神科病院協会精神医学会	榎本ゆり子、井戸由美子、西田和美、畔上多恵子、前田佳予子、高橋志乃 大阪府下の精神科病院で、咀嚼・咬合力向上のプログラムを6ヶ月間行なった3デイケア通所中の患者を対象とし、昨年6月に本研究に同意を得ることのできた患者56名に再調査を行なった。6カ月間の関わりでは患者のデータには大きな変化はなかったが、職員に実施したアンケート調査から、本研究が開始されたことにより、患者の早食いや咽頭詰りについての具体的な対策を検討する必要性を感じ、実施するようになった。
65. 精神科における咬合力改善への取り組み	共	2011年07月	第39回日本精神科病院協会精神医学会	中村友紀、井戸由美子、田頭優、佐谷誠司、岡村武彦、榎本ゆり子、高橋志乃、前田佳予子 昨年、統合失調症患者の食行動問題の改善に取り組んだ結果、意識の向上や食事時間の改善がみられた。今回、同様に咬合力向上に取り組んでいるC病院とデータを比較・すり合わせを行うことで、病院単位ではなく精神科病院としての傾向を調査した。今回他病院とデータをすり合わせる事により、患者の向精神薬の使用状況や肥満度、色変りガムの使用等から、咀嚼力を推察する事はある程度可能であると考えられる。
66. 大阪府下の精神障害（統合失調症）者における咀嚼機能評価	共	2011年01月	第14回日本病態栄養学会年次学術集会	前田佳予子、高橋志乃、井戸由美子、榎本ゆり子、畔上多恵子、西田和美 精神障害者の誤嚥・窒息に関連する疾患予防の必要性が指摘されて

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
の現状2				いる中、精神障害者の多くには「早食い」という食行動の問題がある。今回、我々は握力及び咀嚼能力の指標である咬合力と色変わりチューイングガム法から評価して現状の把握を行った。摂食時間は対照群と比較した結果から「早食い」であることが伺えた。また、咬合力と色変わりガム法による咀嚼機能評価により、精神障害者の誤嚥・窒息の予防に繋がると考えられた。
67. 大阪府下の精神科障害（統合失調症）者における咀嚼機能評価の現状1	共	2011年01月	第14回日本病態栄養学会年次学術集会	高橋志乃, 前田佳子, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 畔上多恵子, 西田和美
68. 精神科における早食い及び咬合力改善への取り組み	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	誤嚥・窒息リスクの一つに咀嚼能力がある。今回、我々は握力及び咀嚼能力の指標である咬合力と色変わりチューイングガム法からの評価で、各施設の比較検討を行った。今回、色変わりガムを用いた測定により、スタッフが患者の咀嚼に対して注意をする傾向がみられた。
69. 当院外来患者における咬合力についての調査	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	田頭優, 井戸由美子, 中村友紀, 佐谷誠司, 岡村武彦, 高橋志乃, 前田佳子
70. 精神障害（統合失調症）者における咀嚼機能評価の現状	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	精神科の患者は、薬の副作用もあり食事時の誤嚥や窒息の事故の危険性が高いといわれている。BGMを用いた環境作りや咬合力・咀嚼回数向上のプログラムを実施することで、食事時間の改善がみられ、咬合力の向上の傾向もみられた。病初期より多職種協働にて、早食い防止や咬合力向上に努めることが患者のQOLの維持に繋がると考えられる。
				榎本ゆり子, 高結花, 増子美佐, 三谷麻希, 井戸由美子, 前田佳子, 高橋志乃
				畔上多恵子, 河野榮子, 西田和美, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 高橋志乃, 前田佳子
71. 大阪府下の精神障害者における咀嚼機能の比較検討	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	大阪府下の精神科病院デイケア(4施設)に通所している統合失調症患者で本調査に同意が得られた117名を対象に同一メニューによる摂食時間の調査、咬合力、咀嚼力(色変わりガム)の測定を行った。摂食時間は対照群と比較した結果から短時間であることから「早食い」であることが伺えた。また、咬合力と色変わりガム法によるa*値の咀嚼機能評価により、精神障害者の誤嚥・窒息の予防に繋がると考えられた。
				西田和美, 畔上多恵子, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 高橋志乃, 前田佳子
72. 咬合力アップ事業における顔筋トレーニングを併用した運動の効果と方法～活力のある高齢者をめざして～	共	2010年10月	フィットネス・サミット2010	今回、我々は咀嚼能力の指標である咬合力と色変りチューインガム法(以下、色変わりガム)からの評価で、各施設の比較検討を行った。4デイケアのうちDは1年前より多職種協働で昼食時に音楽を導入した食環境作りや咬合力アップ運動等を実施しており、その効果がみられたのではないと思われる。今回、色変わりガムを用いて測定することによって、スタッフが患者の咀嚼に対して注意をする傾向がみられた。
				芝崎美幸, 高橋志乃, 前田佳子
73. 外来肥満患者における栄養教育の媒体と性格傾向の関連性について	共	2010年09月	第57回日本栄養改善学会学術総会	兵庫県西宮市独居高齢者の介護予防、並びに活力のある高齢者を目指すための健康づくりを支援するために、咀嚼能力に注目し、機能向上トレーニングを行うプログラムを考案して実施後の状況と関連因子を明らかにすることを目的とした。運動介入後に殆どの参加者に咬合力の増加が認められた。運動を導入することで、咀嚼や運動に対しての高齢者の意識が変化することも今回の結果に繋がったと推察される。
				高橋志乃, 谷野永和, 前田佳子
74. アメリカンフット	共	2010年09月	第57回日本栄養改	今回われわれは、東大式エゴグラム新版TEG2を用いて、性格によって患者の意識変容や検査値に与える影響について調査を行なった。性格分類の結果より予後が良い群と予後が悪い群の2群に分類した。罹患年数が経つにつれて検査値の改善が見られず、かつ予後が悪い群の人数が多かった。このことから、性格が罹患年数や検査値に与える影響が伺われた。
				藤田和代, 高橋志乃, 前田佳子, 松葉圭子, 油谷浩之, 松葉真

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
ボール部員における食事状況について～夏季の合宿における対応～			善学会学術総会	アメリカンフットボール部員の夏季合宿に帯同して、選手の食生活の実態を把握した。
75. アメリカンフットボール部員における食事状況について～新・旧1年生のエゴグラムと食事状況の比較	共	2010年09月	第57回日本栄養改善学会学術総会	松葉圭子, 高橋志乃, 前田佳予子, 藤田和代, 油谷浩之, 松葉真 性格特性ごとの栄養素摂取量や日常の食生活の実態と問題点を見つけ指導し、大学生アメリカンフットボーラーの基礎となる1年に食意識を改善して、肉体的、身体的のさらなる向上のため新・旧1年生のデータ比較をおこなった。
76. A精神科病院におけるBGMの利用と摂取改善に関する効果	共	2010年09月	第57回日本栄養改善学会学術総会	前田佳予子, 高橋志乃, 井戸由美子, 橋本加代 統合失調症患者に食事中にBGMを流して、早食いの改善が見られるかについて介入調査をおこなった結果、食事時間が延伸した。
77. A精神科病院におけるBGMの利用と摂取栄養改善に関する効果	共	2010年01月	第13回日本病態栄養学会年次学術総会	高橋志乃, 田頭優, 前田佳代子, 井戸由美子 統合失調症患者の多くは早食いという食行動の問題がある。今回、我々は食事中に音楽療法を導入して早食いの改善がみられるかについて検討を行った。 BGM介入後で食事摂取時間が若干延長したことから、対象者が落ち着いて食事摂取できる食環境の継続により、早食いの改善がみられることが示唆された。
78. 糖尿病患者におけるDVDとパンフレットの栄養教育効果の検討	共	2009年12月	第8回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	高橋志乃, 佐々木悠里, 瀬川早代, 北谷直美, 辻とも子, 前田佳予子 糖尿病治療の基本の一つは食事療法であり、患者にやる気をおこさせる栄養教育が求められる。今回、調理方法を視覚的に分かりやすく伝える教育媒体を作製し、媒体の効果について検討した。媒体を用いた栄養教育では、対象者のメニューへの理解や調理意欲に高い意識が見られ、アンケート調査から食事に対する前向きな姿勢が伺われたことから、より分かりやすい視覚的に訴える教育媒体の有効性が示唆された。
79. 糖尿病の食事指導の取り組みについて	共	2007年01月		竹内悠子, 任和子, 辻とも子, 北谷直美, 大串美奈子, 大屋道洋, 黒江彰, 谷口中, 清野裕
80. 脳血管疾患患者の機能回復に与える因子について	共	2007年01月		柴田亜樹, 小林知未, 徳光恵美子, 早川みち子, 南部征喜
81. 加熱操作における食品の抗酸化活性への影響	共	2006年10月		石橋知奈美, 伊藤毅, 高木康之, 小倉和恵
82. 京都府北部における高齢者の食事の特徴について(第1報)	共	2006年10月		山本亜依, 遠藤朝美, 副田久美子, 谷文子, 八木典子
83. 自立を目指す高齢者の運動継続に関わる要因について－血流測定結果と食習慣との関係－	共	2006年10月		松葉真, 谷郷悦子
84. 要介護高齢者施設の日常生活における摂取エネルギーと消費エネルギーの評価について	共	2006年10月		左官智子, 橋本加代, 前田圭禧
85. ユニットケアにおける食事提供方法の評価について	共	2006年10月		五島千寿子, 橋本加代, 前田佳予子, 谷野永和, 上羽敦子
86. 京都府和知町における高齢者の食事・生活の傾向調査ブリード・プロシードモデルを導入して		2005年09月		
87. Reduction of Blood Sugar Level in db/	共	2004年11月		Takeo Hasegawa, Kousuke Murabayashi, Yasuhiro Kosaka 同一種, 同一工程の産地が違う食用緑茶粉末をdb/db mice に16週間

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
db Mice by Green Tea Administration		2004年10月		連続投与を行い、血糖値、体重、中性脂肪等について違いがあることを発表した。
88. 京都府下における高齢者の食事・生活の傾向調査 和知町		2004年10月		
89. 京都府下における高齢者の食事・生活の傾向調査 京都府網野町	共	2004年10月		
90. 京都府下における高齢者の食事・生活調査(7)	共	2004年10月		
91. 京都府下における高齢者の食事・生活調査(6)	共	2004年10月		前田佳子、大塚由紀、池口あゆみ、茶野真由美、森恵子、野田めぐみ、高橋大輔、谷文子、前田圭禰、真鍋篤志、京都府船井郡和知町の高齢者1508人を対象に食生活実態調査を開始して3年が経過した。和知町における食に関する内容で地区診断を行い、和知町保健センター職員・老人クラブ、ヘルスメイトのメンバーと話し合い、和知町としての食の自立支援のあり方について検討した。調査結果を学生が老人クラブや社会福祉協議会のメンバーに報告や指導を行っていることを報告した。
92. 京都府下における高齢者の食事・生活調査(4)～(5)		2003年09月		前田佳子、大塚由紀、池口あゆみ、茶野真由美、森恵子、野田めぐみ、高橋大輔、谷文子、前田圭禰、真鍋篤志、京都府竹野郡網野町における高齢者の食生活調査を実施して、3年の経過を評価し、高齢社会での栄養管理や「食の自立支援」について教育や支援方法について検討した。
3. 総説				
1. 地域包括ケアシステム構築に向けて歯科は何かできるのかー管理栄養士が歯科に期待することー	共	2019年	日本老年歯科学会誌34巻1号p59-64	前田佳子、水島美保：日本は少子高齢化、人口減少という問題をかかえ、しかも高齢化率は30%を超えている。この問題を取り切るために地域包括ケアシステムの構築が急がれているが、中々進まないのが現状である。高齢者が自分の住み慣れた地域で最期まで暮らすための鍵となるのが、「栄養と食事」である。そのためには、栄養、口腔とリハビリの三位一体の連携が重要であり、食べることには歯科医師との連携は大変重要であることについて述べている。
2. 日本在宅栄養管理学会の歩み	共	2015年06月	日本在宅栄養管理学会Vol.2(3)3-7	田中弥生、前田佳子 在宅訪問栄養食事指導の誕生から認定在宅訪問管理栄養士の役割と現状そして、日本在宅栄養管理学会の今後の展望について
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 人生の最終段階を含めた虚弱高齢者に対する食支援の在り方に関する研究	共	2023年8月	一般社団法人日本在宅栄養管理学会	理事長：前田佳子 研究代表者：田中弥生 2021年度(前期)指定公募 公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成事業として、看取りプログラム構築を目的に調査、ツールの作成を行い、管理栄養士が早期に介入することの効果、終末期における訪問栄養指導の介入回数は2回以上で効果があることを明らかにした。また、早期介入することで、療養者、介護者の食に関する負担が軽減されたことや死の直前まで食べたいものはなにかを家族、療養者から聞き取った。レシピ集も作成した。
2. 管理栄養士による在宅高齢者の栄養管理のあり方に関する調査研究事業	共	2015年03月	公益社団法人 日本栄養士会	本川佳子、前田佳子、工藤美香、田中弥生、小野沢滋、原礼子、遠藤慶子 在宅訪問栄養食事指導を実施する管理栄養士実態調査を「在宅訪問管理栄養士認定制度」における事例レポート366事例より、事例対象者の年齢、介護度分類、介護度別の疾患、介護度と認知症の関係、がん患者への見取りの現状について調査した。
3. 在宅療養患者の摂食状況・栄養状態の把握に関する調査研究	共	2013年03月	国立長寿医療研究センター	太田秀樹、三浦久幸、齋藤京子、葛谷雅文、前田佳子、大石善也、大澤光司、大塚理加、佐藤美穂子他 在宅療養患者において、生活の質を維持するには、栄養状態の維持・改善は不可欠である。特に高齢者においては、低栄養状態が散見されるのも事実である。どのような要因が低栄養に関連しているのかについて在宅療養者の実態を明らかにした。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
4. 雑誌掲載：社団法人兵庫県老人福祉事業協会平成18年4月28日第62号P4「福祉の風」～栄養ケアマネとは～		2006年		
5. 雑誌掲載：給食ビジネス 食が変わる！食を見直す！ 柴田書店 平成17年9月20日発行 P45-48 「食行動と介護サービス予測」について		2005年		
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2020年11月～現在	一般社団法人日本在宅ケアアライアンス理事
2. 2014年6月1日～現在	日本在宅栄養管理学会 日本静脈経腸栄養学会 日本糖尿病学会 日本老年歯科医学会 日本家政学会 日本公衆衛生学会 日本栄養改善学会